産地強化に向けた新たな経営モデルの提案

■背景とねらい

当支援センターでは、管内の主力品目であるきゅうりの生産力向上を図るため、平成 30 年度から重点活動課題として位置付け、取り組みを進めてきた。令和３年度からは「地域性を生かした魅力あるきゅうり経営の推進」と題し、連作障害の防止に効果的な養液栽培の経営評価と導入の推進および産地強化に向けて地域特産品である市田柿との複合経営モデルを作成した。

今年度は市田柿複合経営の改編に加え、振興品目である「ねぎ」を加えた複合経営モデル作成により、きゅうり栽培の更なる推進に取り組んだ。

■本年度の取組

１　養液栽培の経営評価と導入推進

（１）導入コストの把握と経営評価

養液栽培導入農家への聞き取りをもとに実態を調査したところ、主な利点として①設備の設置と撤去作業の省力化②つるおろし方式による整枝作業の単純化③かん水と施肥の自動化による管理作業の省力化の３つが挙げられた。特に雨よけ施設を利用した他品目との複合経営に取り組む経営体では、柿干し場や水稲育苗等の品目を切り替える際に有用であることが示唆された。また、農家と併せて資材販売業者に対して聞き取りを行い、コストを試算した。導入には 10a の雨よけ施設で 46.5 万円程の資材費がかかるほか、世界情勢の影響を受け、管理に必要な液体肥料代は昨年と比較して２割程度の増加がみられた。

（２）仕立て方法の検討

大鹿村のきゅうり栽培農家において「更新型つる下ろし栽培」に取り組んだ。対象ほ場では栽培品種としてニーナを利用したが、生育速度が速く過繁茂によるつる枯病等の蔓延が確認された。

２　効率的な複合経営の推進

（１）ねぎ等との複合経営モデルの作成

ねぎとの複合経営に取り組む農家４戸に対し、経営状況の聞き取り調査を行った。調査結果を踏まえ、農業の実態を反映させた南信州版の複合経営モデルを作成した。

（２）市田柿との複合経営導入手引きの作成

昨年度に作成した「きゅうり＋柿複合経営モデル」をベースに、きゅうりの栽培における排水対策や柿干し場への転用時の留意点等について加筆、修正を行い、「市田柿との複合経営における導入手引き」を作成した。

■本年度の成果

１　養液栽培の経営評価と導入推進

資材販売業者によると情勢の変化により養液の調達が難しい状況となっていることから、当面は新規導入を希望する農業者への対応は困難である。また、「更新型つる下ろし栽培」については、わき芽への切り替えのために摘心作業を定期的に行う必要があるため、わき芽の伸長が旺盛なニーナ等の品種には適さないことが分かった。

２ 効率的な複合経営の推進

「ねぎとの複合経営モデル」および、バージョンアップした「市田柿との複合経営における導入手引き」を作成し、関係機関と共有した。

■今後の課題と対応

今年度の取り組みを踏まえ、当面は養液栽培を推進する状況にはないと判断し、次年度は本項目を一般活動課題に移行し、養液栽培に興味を持つ農家を中心に、導入に向けた情報提供を行う。仕立て方法については、わき芽の発生程度といった観点から更新型つる下ろし栽培に適する品種選定などへの活動展開を検討する。

本年度作成した「きゅうり＋ねぎ複合経営モデル」をベースに、きゅうりやねぎに共通する排水対策の留意点等について加筆、修正を行い「ねぎとの複合経営における導入手引き」に改編し、関係機関と共有して、就農や経営に係る相談等に活用する。　　（地域第一係：倉科　妙香）